
怪異の出る町で

ルリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怪異の出る町で

【Nコード】

N5216U

【作者名】

ルリ

【あらすじ】

高校2年生の竹野友里は、親友の亜紀と一緒に登校した。そして、教室に行ってみると、2人の教室がとんでもないことに！！
2人は、教室を元に戻すために努力を積み重ねていく内に、ある真実へと行き着くのだが、それは……。

始まり

001

私は、夏休み、私に出会った。竹野友里という、自分の存在を確かめた。

あつて良かった。いや、あらなければならぬ出来事だったのだけ
れど。

あれが、無かつたらと思うと、やりきれない。

だって、あの時から、私の生活のすべてが、変わってしまったのだ
から。

私の、最近のこと。あるいは、2年位前の事柄を話す前に。

2

5年前の、あの出来事から、聞いてもらおう。

001(2)

私立砂浜中学校高等学校。私の通う高校の名前だ。今は、高2の秋。
5年前と言えば、中学校1年生。

ややこしいので、その時の時系列で、話を進めよう。

002

「おはよー。友里」

「おはよー。亜紀」

そんな普通の挨拶を交わしながら、登校する私達。

今は、8月。クラス全員の顔と名前を覚え、他のクラスに、友好の輪が広がっていく時期だ。

「あついねー。私なんか、今すぐ溶けちゃうんじゃないかって思う」
「よ」

「だよねー。今日なんか特に、暑さ全開！ってかんじだよねー」

「そうそう」

「あ、そうだ！コンビニでアイス食べて行こうよ！」

「買い食いは禁止だよ」

「そうだったっけ？」

私の買い食いのクセは、いつまでたっても直らないらしい。

亜紀が呆れた様な顔になった。

あと、言っておくと、亜紀は親友。消しゴムを拾ってあげた時に、友達になっただけだっけ。

「昨日、先生が言ってたじゃん。」 買い食いは禁止です。みんな、絶対にしない様に”って」

「えー。どうせ、誰も見てないでしょうっ？」

「後ろに先生が歩いてるのに、どうして気がつかないかなー」

「え？・・・うわっ！本当だ！」

後ろを先生が、普通にあるいていた。しきりに時計を気にしている。

あれ？時計？

「ヤバイよ、亜紀！遅刻、遅刻っ！」

「え？うそ？・・・って時間ヤバっ！走れー！！」

急いで下足へと駆け込む私と亜紀。

教室が、どんなことになってるかなんて、考えてもみなかった。

始まり（後書き）

時間が無いので、いつも、これくらいの長さになってしまつと思つ
のですが、ご了承下さい。読んでいただき、ありがとうございます。

教室

003

私達は、廊下を走った。全速で……。

そして、教室の前で、立ちつくした。

教室の中には、闇が広がっていた。

黒く、暗く、何もかも吸い込んでしまいそうな、闇が、広がっていた。

自然に、鼓動が速くなる。

「ねえ、友里……」

「……」

「何？これ……」

「……」

「黒い画用紙とかじゃあ、なさそうさんだけど……」

亜紀は冷静だ。こんな時にも、のんきなことを言っている。

私は、父が最後に残した手紙を思い出していた。

そこには、こつ、書いてあった。

――友里が、自分のすべてを知らねばならぬ時。大切な物が一つ、闇に包まれる。――

――その闇と、友里の心を通じさせる物を見つけた時。――

――闇は、あるべき場所へ、帰って行くだろう。――
え。

――真実は、刀の様に。鋭く、凶暴に、お前の心を切り裂くだろう。――

――ただし、得る物は、大きい………――

――

――

その時は、意味が分からなかった。

だが、教室が闇に包まれている以上、きっと、このことなのだ。

そして、空白のあった手紙の意味が、今、よく分かった。

「亜紀……」

「ん？何？」

「お母さんに伝えておいて。」手紙の意味が分かった。少し出かけてくる。”って”

「おっけー」

たったたつと、足音をたてながら去って行く亜紀。

こういう時、亜紀は何も聞かずに伝えてくれる。

余計な詮索はしない。

私は、教室のドアから、出来るだけ距離をとった。

私の教室は、廊下の突き当たりにあるので、約10m位だ。

・・・緊張する。

本当に、このやり方で、あっているのか。

しかし、・・・・・・・・選択肢は、これしかない。

私は、廊下を走って、

教室の闇へ、飛び込んだ。

教室（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。誤字・脱字等あれば、お許してください。

闇の中

私は、闇の中を落ちていた。

どこまでも黒い、闇の中を……。

底は、もちろん、見えなかった。

――
――
――
――
――

………突然、眼が覚めたかの様に、意識が回復した。

だが、体が動かない。

小指一本、動かない……。

私の体は、さっきとは正反対に、輝く光の中に、浮かんでいた……。

目の前に人影が見える……。

何かを、話している……。

聞き取るうとすると、頭の中に、直接、その声が、聞こえてきた。

――竹野……友里……

相手は、私の名前を、知っている様だった。

――今から話すことを注意して聞いて下さい――

――あなたの父上より、伝言を承っております……

――伝言は、”手紙の力を放て”とのことです――

――この伝言と同時に、渡す様に言われた物です。――

――お受け取り下さい――

――またお会いする様なことがありましたら――

――その時は、ご随意に……

瞬間、私の体はまた、闇に包まれたのだった。

黒い箱

「友里・・・友里！」

亜紀に揺さぶられて目が覚めた。廊下で寝ていたらしい。

右手には、さっき人影に貰った黒い箱がある。どうやら、夢ではなかったらしい。

「あー。びっくりした。死んだのかと思っちゃった」

「こんな所で、どうやってたら死ぬのよ」

「うーん・・・転んだりとか？」

「・・・・・・・・・・」

私はお婆さんか・・・。

っていうか、仰向けに転ぶ人って、いないでしょ・・・・・・・・・・。

「で、それ何？」

亜紀が、黒い箱を指差して言う。

「分からないの。さっき貰った所だから」

「開けないの？」

「 . . . 」

ブラックボックス

「開けない？」

「えーっと……そうだね。開けてみよっか」

「うん。そうしないと、この物語、全然進まないし」

え？……いや、それ言っちゃ駄目でしょ。

「何かな？ 食べ物？？」

「違っと思うよ」

亜紀がっかりした顔をする。

「あ……いや……そうとも限らない」

「本当！？」

言ったとたん、亜紀はパアッと目を輝かせた。

単純だなあ……。

お菓子で誘拐される人って、たぶん亜紀みたいなのを言っんじゃないかな
いだろうか。

「開けるよ？」

私は、箱をゆっくりと開けた。

・・・その時だった。

「きゃああああああああっ！！！！」

亜紀の悲鳴が、廊下中に響き渡った・・・。

もう一人

同時刻に、俺、紅暁くれないあきひは、学校の廊下を歩いていた。

「あー。金がない……………」

昨日、買い物（無駄遣いとも言う）で使い果たしてしまったのだ。

ため息をつきながら、廊下の曲がり角を折れる。と…………、

『きゃああああああああっ！！！！』

廊下の向こうの方でしゃがんでいた女子が、悲鳴をあげた。

その女子に隠れて見えないが、もう一人誰かいる様だ。

「どっした？」

駆け寄るとそこには、

…………。

全身を黒い煙で覆われた誰かがいた…………

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5216u/>

怪異の出る町で

2011年11月8日20時07分発行